

劇表現における葛藤場面の意味について

室谷敦子

(三木市立豊地幼稚園)

I 研究の目的

「子ども主体の劇表現」において、お話に対する子どものイメージを第一とし、子ども達が相談しながら、創り上げる。保育者はアイデアを提供したり、混沌としているところを整理したりする役目がある。子ども達は自分のしたい役に出るので一つの役に何人も参加できる、道具の出し入れ、音響効果も子どもに任せている。このような劇表現の中では、葛藤場面が多く見られる。1 友達との気持ちの行き違いで意見を言い合ったり、自分の感情を表現することによって乗り越えていく、外に向けて表われる目に見える葛藤 2 我慢をしたり、あきらめたりと内面的な目に見えない葛藤がある。そこで、その葛藤がどのような意味をもち、劇表現にどうつながっていくのか、子ども達はどのように乗り越えていくのかを実践を通して考えてみたい。

II 方法——実践を通して(5 歳児・1 年保育)

次のような観点から保育実践を整理してみた。

1 目に見える葛藤

① 道具の取り合い「おむすびころりん」「ねずみのすもう」

欲深爺さんが山へ出かけるときに、お婆さんにおにぎりを作ってもらった場面、おにぎりの取り合いが起こった。劇を始めた頃は、欲深爺さんのなり手が少なく、製作のおにぎりは十分足りた。ところが、悪役の面白さがわかると欲深爺さんの役をする子どもが増え、おにぎりが足りなくなり、取り合いになった。(自分のしたい役をするので、一つの役に多数参加することがある。)すると、その様子を見ていた子ども達が、劇の後、たくさんのおにぎりを作り、どんな人数の変動にも対応ができるように準備をしていた。

「ねずみのすもう(発表会当日)」の劇表現をした時、道具の取り合いでA児は自分がしようと思っていたのを他児に取られて、劇に参加しなくなってしまった。そのことに気づいた子ども達が、自分の出番の合間をぬってA児のところに集まってはA児の話聞き、説得をしながら劇に参加していた。次の場面は「ねずみの国」でのねずみの暮らしを想像してわらべうた遊びをしたり、綱引きをしたりする場面であった。この場面は子ども達が大好きだったので、A児が参加するであろうと確信し、様子を見守っていた。予測どおり、A児は劇に復帰した。A児が葛藤を乗り越えることが

出来たのは、他児の思いやりと劇が楽しいという経験があったからだと考える。また、このときに葛藤したのはA児だけではなく、保育者として、ここでA児が出なかったら、(ア)保育者としての評価が落ちることへの心配(イ)これまで育てたいと願ってきたのは、葛藤を乗り越える力であり、劇を進める以上にそのことを大切にしてきたことなどが、私の中で葛藤した。

② 思い通りにならない「おたまじゃくしの101ちゃん」

登園後(6月)の好きな遊びの時に数人の子が「おたまじゃくしの101ちゃん」の劇を始めたが、B児が人数が足りないことに気づいて、積み木遊びをしている友達を誘いに行った。ところが、自分の気持ちを訴えても他児が反応をしてくれなかった。積み木遊びをしていた子は誘われた時に「嫌や、したくない」とはっきりと断っていた。この「嫌や」と本音が言える雰囲気はB児に自分の思い通りにはならないことやそれぞれにしたいことが違うことに気づかせたのだと思う。また、断った回りの子どもも、B児の落胆ぶりを見て、B児の気持ちを思いやることができたのではない。これをきっかけに、積み木遊びをしていた子ども達の中には、B児達に関心を持ち、劇に参加する子も出てきた。

③ 自己主張をする「白雪姫」

7人の小人の役になりたい子どもが多く、並んで出番を待っていた。そのことに気づいた子どもが、強引に説得し始め、先頭から数えて8番目の子どもから後ろを切ろうとした。この説得に○無関心を装う子 ○一緒に人数が多いことを言い、同調している子 ○自分はどうしてもこの役がしたいと主張をする子等、この場を乗り切ろうとする姿が見られた。それぞれが違った形で自己主張をしている。最後はこれでは劇が出来ないと先頭から7人が小人役になり、劇を進めるために妥協をした。

④ 共通理解ができていない「花咲爺さん」

「花咲爺さん」で、臼の中から小判が出てくる場面で、①初めから臼の中に小判を入れて準備をしていた子ども②初めから入っているのはおかしいと入っていた小判を取り出していた子どもとの意見がぶつかった。①は劇の進行を考えて、餅をつき出してから小判を取りに行くのは変だと考えて準備をしていた。②は餅つ

きを始めてから小判が出てくるのに、初めから入っているのはおかしいとその場の状況から考えていた。①にするか②にするか話し合いの場を持った。数人の中で、共通理解をしていても、学級全体で共通理解をしていかなければ葛藤が生じることがある。それでも細かい内容まで話し合わなくても、自然に子ども同士の間では、共通理解が出来ているようである。流れに変更があったときは、劇中、小声で伝えて回る子どもの姿があったり、雰囲気や友達の動きを察知したりして、自然と共通理解することが多い。非常に不思議である。

2 内面的な目に見えない葛藤

① 自己充実度の違い「てんまのとらやん」

「てんまのとらやん」の劇に登場するうなぎの表現を、ほとんどの子が喜び、次に話が進まなかった。そのうち、C児がナレーションで次へ進めようと試みたが、他児の反応はなく、C児はため息をついていた。他児の表現を認めようとするあまりC児は、自分が先に進めたいのを我慢してしたように思われる。個々の自己充実度の違いが劇を止めてしまったように思う。それからC児はこのうなぎの表現に付き合うようにしていたが、やはり、前に進まないのは面白くない。先に進みたくても進めない、自分の意図が伝わらないもどかしさがC児の表情からうかがえた。

② 表現の場が少ない「じごくのそうべえ」

男児が非常に活発で、女児がその陰に隠れ、表情が暗くなり表現意欲をなくしていた。特にD子の表情は暗くなり、楽器係のところずっといて、身体表現をしなくなってきた。楽器による音響効果が面白いと思っているのか、劇が楽しくないから楽器係にいつているのか。数日間、観察を繰り返した。「面白くないのではないか」「うまく自分の気持ちが表現できないのではないか。」と考えた。そこで、女児を生かすために、劇の最後にそうべえが死んだと聞きつけた長屋の人がお悔やみをいう表現の場を作ることにした。女児はお供え物を置き、身振り手振りで接待をし、ゆっくりとした口調で奥さんを延々と演じるようになった。これをきっかけに女児は他場面でも積極的に参加するようになっていった。また、自己発揮できるようになったことで、表現が豊かになった。

③ 葛藤によって自分を知る「ねずみのすもう」

「ねずみの国」でのねずみの遊びを考え、綱引きを入れていた。いつも人数を調整してそろえていたのに、ある日、体の大きな男児が、自分のグループの方が一人少ないのに「これでいいから」と自信満々で、綱引きを始めた。ところが、戦いに負けて、大粒の涙をこ

ぼし、地団駄を踏んで、悔しさを全身で表した。この葛藤を通して、男児は自分の力を過信していたことや傲慢さに気づいたのではないだろうか。

III 葛藤が劇表現にどうつながっていったか

○友達の表現を認め、自分の表現との違いに気づく。

○劇をスムーズに進めるために、自分の考えを言い、他者の意見も聞くようになる。また、我慢をし、妥協をすることもある。予測して行動するようになる。

○製作に発展したり、表現が豊かになったりする。

○共通理解をしていないと進まないことやタイミングがずれることから、友達の表現を良く見ようとする。葛藤を繰り返しながら共通理解をし、まとまりのある劇になっていく。

IV 葛藤を乗り越えるためには

○葛藤を乗り越える第一条件は「劇が楽しい」ということである。それも、友達と表現する喜び、一つの劇表現をとともに創り上げていく喜びを経験しているかによる。

○葛藤や挫折、乗り越えた喜びや自信に気づいてくれる保育者や友達がいる。

○日常生活の中で、葛藤を表現する場があり、本音で語れる雰囲気が必要である。

V 考察

●1目に見える葛藤は分かち合い（話し合い）の場を持ち、子ども達に自分の気持ちを語らせることにより、互いの考えに気づき、解決策を見つけていく。2内面的な目に見えない葛藤は保育者が子どもの内面に気づき、その気持ちを汲み取ることから始まるが、これは非常に難しく、保育者の観察力、洞察力によるところが大きい。保育者として、子どもの内面を探ろう、理解しようとする姿勢が必要ではないだろうか。

●葛藤がその子どもや周囲の子どもだけに終わらず、時には学級全体で考え、葛藤によって経験した挫折感を共有し、それを乗り越えたときの喜びや自信を分かち合う。劇作りで得たものが、学級としてのまとまりを強め、子ども同士の絆を深くする。

●どの葛藤場面でも、子ども達は、自分自身でまたは友達や保育者の力を借りて立ち上がり、葛藤を乗り越えるたびに、たくましくなっている。また、より良い方向へ発展させようと努力し、協力し合っている。その姿を見るたびに、子どもへの信頼、乗り越えていくことへの期待、子どもが自分自身と闘っている姿への尊敬の気持ちが湧く。保育者として、子ども達が葛藤を乗り越えていく手助けや方向を間違えないように、援助の方法やそのタイミングを考えておく必要がある。